

氏名：宇佐美桃子  
学位の種類：博士(学術)  
学位番号：甲第69号  
学位授与の日付：2022年3月18日  
学位授与の要件：学位規程第4条第2項該当  
学位論文題目：音楽と懐かしさの関連についての包括的研究  
学位審査委員：主査 教授 渡辺 恭子  
副査 教授 川瀬 正裕  
副査 教授 加藤 大樹

## 論文内容の要旨

**【序 章】**序章では、「懐かしさ」について複雑な記憶や感情から成り立っているとし、懐かしい記憶を思い出し過去を振り返ることは、様々な年代にとって重要な役割を果たすとしている。さらに、懐かしい音楽は回想など臨床場面でも用いられているとした上で、本論文の目的として、「懐かしさに関して生涯発達の視点を考慮したライフサイクルごとの検討を行う。さらに、自伝的記憶の回想に着目し、懐かしい音楽を聴取した際の心理的効果について検討を行う」としている。

**【理 論 編】**第1章では、懐かしさに関する先行研究について概観し、懐かしさは複合的な感情であり、尺度構成を行った研究からも複数の要素があるとしている。また、懐かしさは様々な刺激によって喚起され、環境因や対象者の心身の状態、パーソナリティとの関連があると述べている。さらに、懐かしさには大きく4つの機能があり、年齢とともに変化するとしている。

第2章では、音楽聴取に関する先行研究を概観しており、音楽聴取の心理的作用に関しては特に不快感情に着目した研究が散見され、ストレス低減とリラックス効果が認められたとまとめている。さらに、音楽聴取の効果は音楽や聴取者の特徴によって変動するものであり、研究時にはどの特徴を統制し比較するのかが可能な限り明確にする必要があると述べている。加えて、音楽の感情価と聴取者の気分が一致していることが効果を促すとしている。

第3章では、システマティックレビューの手法により、懐かしさと音楽の関連について検討がなされている。125件の先行研究のうち、16本の論文が選定されていた。先行研究では、特に懐かしさがもたらす感情と社会的つながりに関する研究が多かった。懐かしい音楽と自伝的記憶に関する研究では、音楽によって内的な感情が喚起されることが示されている。さらに、年代によって自伝的記憶の質やもたらされる感情が異なる可能性を示唆している。

以上より、懐かしさが複合的な感情であることを踏まえ、懐かしさの要素に着目して懐かしさの機能を年代ごとに比較検討していくことが重要であると結論づけている。また、音楽がもたらす懐かしさの質の違いによってどのような感情体験が促されるか検討することは有用であるとしている。

**【実 践 編】**第4章では、懐かしさ感情尺度の因子構造を検討し、懐かしさが複合的な感情か

ら成り立っていることを踏まえ、金城式懐かしさ感情尺度 (Kinjo Nostalgia Scale ; 以下、KNS) を構成している。調査対象者は女子大学生 133 名であり、質問紙調査を行っている。探索的因子分析の結果、第 1 因子『親しみ』、第 2 因子『ほろ苦さ』、第 3 因子『せつなさ』の 3 因子構造が導き出され、さらに確証的因子分析を行った結果、すべてのパスにおいて有意な値を認めている。さらに、I-T 相関と G-P 分析により因子構造の妥当性が確認されている。以上より、懐かしさは複合的な感情であり、KNS を活用することで懐かしさの程度を客観的に検討することができ、懐かしさの質を比較検討することが可能としている。

第 5 章では、青年期前期にあたる中学生を対象に、懐かしさ感情と心理社会的発達課題の関連について検討している。まず、中学生を対象に金城式懐かしさ感情尺度 (中学生版) (以下、KNS (中学生版)) を構成することで懐かしさの要素を比較検討し、青年期における懐かしさ感情の変化について明らかにすることを目的としている。調査対象者は中学 1 年生 104 名であり、質問紙調査を行っている。KNS (中学生版) における探索的因子分析の結果、2 因子が導き出され、第 1 因子は『親しみ』、第 2 因子は『ほろ苦さ』と命名されている。以上より、青年期前期は、回想した出来事からの時間の幅が小さく身近にある出来事としてとらえており、複雑な感情を抱えることが難しく、分化されていない未熟な状態としている。さらに、エリクソン心理社会的段階目録検査 (Erikson psychosocial stage inventory ; 以下、EPSI) と KNS (中学生版) について共分散構造分析を行った結果、あたたかい懐かしさがアイデンティティの確立に影響を与えていた。このことから、青年期前期は、ポジティブな過去を見つめ自己に向き合い始めた段階だと述べている。

第 6 章では、中年期における懐かしさ感情と心理社会的発達課題の関連について検討する目的で、中年期を対象に金城式懐かしさ感情尺度 (中年期版) (以下、KNS (中年期版)) を構成し、懐かしさの要素に着目して記憶の想起時にどのような懐かしさ感情が伴うかを考察している。調査対象者は、40~50 代の 129 名であり Web での調査を行っている。探索的因子分析の結果、4 因子が導き出され、第 1 因子は『親しみ』、第 2 因子は『ほろ苦さ』、第 3 因子は『おかしさ』、第 4 因子は『回帰欲求』と命名されている。中年期は、『おかしさ』『回帰欲求』が認められ、記憶から時間が経過していることによって客観的に過去を振り返ることができる結論づけている。さらに、EPSI と KNS (中年期版) の共分散構造分析を行った結果、他者との関係が築けていると前向きな懐かしさを感じることができると述べている。

第 7 章では、青年期前期、青年期後期、中年期の事例を取り上げ、各年代の心理社会的発達課題と懐かしさの特徴を質的に検討している。その結果、青年期前期では葛藤を伴う内省が行われない事例と自己に向き合い始め自己評価の低い事例が見られ、内省の質の個人差が大きいとしている。青年期後期では、自伝的記憶に伴う具体的なエピソードの記述から、心の内で内省を深め自己イメージを獲得できる者と、内省に葛藤を抱え自己イメージ確立という課題に直面している者がいる可能性を示唆している。中年期では、発達課題を達成できた者はポジティブとネガティブ双方の出来事に少し距離を置いて自分らしさとして俯瞰してみる力がついていき、発達課題を達成できていない者は過去への抵抗感があると述べている。

第 8 章では、青年期前期の中学生を対象として、懐かしい音楽聴取に伴う感情体験について検討している。また、音楽聴取後にグループでの対話交流を設け、体験と気分を与える影響を検討している。調査対象者は、中学 1 年生 108 名であった。条件は、音楽聴取のみを行う条件 (以下、music 条件) と、音楽聴取に加えて他者と交流するワークを行う条件 (以下、work 条件) の 2 水準を設定している。懐かしさ体験が気分を与える影響について、music 条件では、あたたかい懐かしさを感じることで、童心に戻る体験ができるとしている。一方で、過去を客観的に思い出してほろ苦さを感じると、子どもに戻るような軽快な体験は促されにくく、自己理解のみが深まると推察している。work 条件では、他者と共有することでより具体的な振り返りに繋がり、否定的側面への直面にエネルギーを必要とした可能性を示唆している。

**【総合考察】** 総合考察では、理論編と実践編の結果を包括的に考察している。青年期前期は自分の過去について親しみを持って受け入れる準備期であり、青年期後期は自分の経験を統

合的に捉えられるようになるが、未だ記憶から喚起される情緒に巻き込まれやすいとしている。さらに、中年期は、発達課題を達成していると過去と適度な距離を保ち、ありのままの自分として受け入れるようになると述べている。以上より、懐かしさと発達課題は互いに密接な関係にあり、懐かしさは人生を統合していく上で重要な役割を果たすと結論づけている。さらに、懐かしい音楽はストレスを低減させ、内的な感情を喚起するとしている。さらに、ネガティブな過去に向き合いにくい青年期前期にとって、懐かしい音楽はクッションになると述べている。

## 審査結果の要旨

本論文では、懐かしさに関して生涯発達の視点を考慮したライフサイクルごとの検討を行なっている。さらに、自伝的記憶の回想に着目し、懐かしい音楽を聴取した際の心理的効果について検討をしている。

理論編において、先行研究を概観している。実践編において、第4章では確証的因子分析・I-T 相関・G-P 分析により、金城式懐かしさ感情尺度 (Kinjo Nostalgia Scale ; 以下、KNS) を構成している。第5章では青年期前期の中学1年生104名を対象にKNS (中学生版) を、第6章では中年期129名を対象にKNS (中年期版) を構成し、懐かしさ感情と心理社会的発達課題の関連を検討している。第7章では事例を取り上げ、各年代の心理社会的発達課題と懐かしさの特徴を質的に検討している。第8章では青年期前期を対象として懐かしい音楽聴取に伴う感情体験について研究している。以上の研究から、懐かしさの構造や質が年齢によって変化し、懐かしさと発達課題は互いに密接な関係にあり、懐かしさが人生を統合していく上で重要な役割を果たすとの結論を得ている。さらに、懐かしい音楽はストレスを低減させ、内的な感情を喚起すると報告している。

本研究は包括的に様々な年代からの検討を試みており、学術的に意義がある。また、本研究の結果は先行研究でも検討されていない内容でオリジナリティがある。さらに、博士論文発表会での発表も合格に達する内容であった。

よって、論文審査・最終試験の評価を合格とすることで審査委員の合意が得られた。

### 【学力の確認】

宇佐美桃子氏は2019年3月に金城学院大学人間生活学研究科博士課程前期課程人間発達学専攻を修了している。

また、金城学院大学人間生活学研究科博士課程後期課程人間生活学専攻の所定の単位を優秀な成績で取得している。

さらに、筆頭筆者として4論文を査読付きの学術雑誌に投稿し、いずれも掲載されている。加えて、学会・研究会発表も4回行っている。

以上より、博士 (学術) の学位に相応しい学力を有すると判断した。

### 【学位審査委員会】

主査：渡辺恭子、副査：川瀬正裕、加藤大樹による論文審査及び最終試験

2022年2月4日に論文審査を行った。さらに、同年2月14日に公開にて博士論文発表会を行った。学位審査委員3名とも、論文「合」、最終試験「合」と判定し、学位審査委員会の審査結果として「合」とすると判断した。以上により、学位審査委員会は、宇佐美桃子氏に対して博士 (学術) の学位を授与することが適当であるとの結論を得た。